

Vol.34 2023年 3月 発行

NPO 法人

CAP 広島だより



発行：特定非営利活動法人CAP広島 〒738-0011 廿日市市駅前 1-3号

TEL・FAX 0829-20-5114

e-mail cap-hiroshima@viola.ocn.ne.jp

HP <https://caphiroshima.org>

<目次>

☆ CAP 基礎講座・スペシャリスト養成講座に参加して…(江種真理).....	1 頁
☆ 「広島を中心に叫ぶ！」～オオクボックスと考える、こども中心の地域づくり～報告 コロナ禍のこどもたち 高校生編 (中林 仁恵)	4 頁
☆OB メンバーから応援メッセージが届きました	6 頁
☆会員からコンニチハ	7 頁
☆ほっと一息のコーナー	8 頁
☆実績&事務所だより	10 頁





CAP 基礎講座・スペシャリスト養成講座に参加して 江種 真里



はじめまして。この度、7月にCAP基礎講座を、11月にCAPスペシャリスト養成講座を修了した江種です。どうぞよろしくお願いいたします。

CAPプログラムを知ったのは、仕事の関係で岡本晴美さんからCAP誕生の経緯についてお話を聞いたことがきっかけでした。身近に幼い子どもがいなかった私には、「子どもの自分で権利を守る力を信じ、生き抜く力を育てる」というCAPの発想はとても新鮮なものでした。

その後結婚し、妊娠・子育てをしていた時期のことです。テロリストが人質の命を奪う姿が世界中に発信され、大人が悪意をもって子どもたちの命を弄び奪う事件や、子どもが子どもの命を奪うという悲しい事件が相次いで報道されました。自分の子どもが生きる社会は、なんと厳しい社会なのだろうと戦慄し、何があっても子どもに生き抜いてほしいと強く願うようになりました。また慣れない初めての子育てでは、睡眠不足や体調不良が続きました。

私にとって子育ては、自分自身が育ち育てられてきた過程や親との関係を振り返ることであったため、時に苦しく感じることもあり、心身共に疲弊することになりました。こうして生じた理不尽な思いが、弱者である子どもに向いてしまいそうになったこともあります。これは、たまたま地域の同世代のママたちとつながることで回避できましたが、自分も子どもへの暴力の加害者となりえると思ったとても恐ろしい経験でした。

ほかにも子どもと一緒に外出では、見知らぬ多くの人にも助けられる一方で、知らない男性が子どもの後ろをついてきたり、クラクションを鳴らされたりなど、怖い思いをしたこともあります。暴力は、子どもたちにとって非常に身近で日常



にあることを実感することが多くなりました。

しかし育っていく子どもやそのお友達からは、子どもの行動の背景には必ず本人の思いや考えがあり、「できるようになりたい」という気持ちにあふれていること、言葉にできなくても大人が思う以上に、時には大人以上に多くのことを理解し感じとっていることを

を教えてもらいました。こんなに力強く可能性にあふれた子どもたちが、暴力によって否定されたり可能性を制限されたり身動きできなくなったりすることのないように、自分らしくのびのびと育ち合う過程を支えたいと考えるようになりました。これが、今回 CAP の一員として活動していきたいと考えるようになった理由です。

さて受講した CAP 基礎講座は、オンライン講座が 2 日間、岡山会場での対面講座が 1 日行われました。オンライン講座は、パソコンの前で長時間座っていることが本当にハードで、眼精疲労と肩こりとの闘いでした…。

講座では、子どもの暴力を中心とした日本の主な出来事の歴史や子ども差別という考え方などを学び、他の受講生の方と一緒に自分たちの子ども時代の価値観や子ども差別の現実についてグループワークもしました。また最終日の対面講座では、暴力のなかでも性的虐待や性暴力の「神話」と事実にかかわる内容が特に印象に残っています。性的虐待の被害者、加害者、家族、支援者が経験や思いを語るドキュメンタリー映画『沈黙を破って』（1987 年 アメリカ）を鑑賞後は、衝撃で言葉が出ませんでした。被害者が語れるようになるまでの軌跡に途方もない苦しみや無力感、苦労があったことを思うとやりきれない気持ちになる一方で、加害者自身もコントロールできない支配欲求や加害者本人の背景を知り、さらにやりきれない気持ちになりました。同時に、涙を流しながらも堂々と語る被害者の姿に、過酷な状況を生き抜いてきたという自負や力強さも感じ、そこまでの過程のサポートの重要性を感じました。

自分とは年齢も、仕事も、参加理由も異なる他の受講生の方とこうした映像を共有し、忌憚ない意見交換やグループワークが頻繁にできた時間は、とても有意

義なものでした。

また岡山会場で開催された CAP スペシャリスト養成講座は、3日間とも対面で行われました。受講生の皆さんは、CAP 基礎講座でもお会いした方たちも含め、CAP スペシャリストとして実際に活動していきたいと考えている方々ばかりでした。基礎講座と比べてより実践的な内容であったため、受講生同士で慣れないロールプレイやグループワークに頭を抱えたり、アドバイスをし合いながら、何とか講座を乗り越えることができました。また受講生同士、志を共にする気安さから、CAP のことだけでなく、現在の仕事や活動のこと、家族のこと、好きなお酒など、3日間一緒に過ごす仲間として仲良くしていただきました。その仲間とは、今もグループ LINE でつながっており、岡山在住の方はロールプレイの練習のために集合されていると聞いています。



私も、CAP 広島メンバーの方と一緒に活動できる日を心より楽しみにしております。若輩者ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします！

お知らせ



CAP プログラム、CAP 広島を紹介する動画の 2 本目を作成中です。間もなく完成する予定です。完成のあかつきには、ホームページで告知いたしますので、気にかけていただくと幸いです。

また、子どもたちに向けた動画も作成準備中ですので、こちらもどうか楽しみにしてください。

「広島を中心に叫ぶ！」

～オオクボックスと考える、子ども中心の地域づくり～報告

コロナ禍の子どもたち 高校生編

中林 仁恵

コロナ禍で行えなかった「“こどもの笑顔と安心、安全な地域づくり！”ネットワーク」主催のイベントが、2022年9月10日（土）県立広島大学サテライトキャンパスひろしまにて開催されました。

司会の大窪シゲキさん(オオクボックス、ラジオ DJ)が開催前にコロナウィルスに罹患、どうなることかと心配しましたが、体調は大丈夫ということで、急遽 zoom で参加。会場では HIPPY さん（歌手）が進行を引き受けてくださいました。

さて今回は、コロナ禍で子どもたちはどんな気持ちで、どんなことを思っているのか直接聞こうという趣旨に賛同して崇徳高校新聞部（14人）のみなさんが登壇してくださいました。事前にも書いてもらった子どもたちのアンケートをもとに進みました。

始まる前に、崇徳高校新聞部から会に対して、「私たちは学校に行って普通に生活しています。自分たちの見えないところで大人たちが支えてくれていることを知りました。感謝を伝えたい。」と話してくださいました。



さて、子どもたちからどんな意見がでたのか一部ご紹介したいと思います。

- ① 最近のニュースであなたが、内容や、取り上げ方が気になるもの、またその理由を教えてください。
 - ・ネットで、芸能人が誹謗中傷されたニュース。デジタルタトゥーで犯罪被害者の名前も長く残ってしまう。
- ② コロナ禍での生活が3年以上続いています、コロナの影響でこんな風に生活が変わったこと、良かったこと、嫌だったこと、教えてください。
 - ・マスクをいつもしている。学校でも、全体の集会はなくなり、教室でリモート参加となった。修学旅行に行けなかった。
 - ・入学時、コロナに罹患し入学式に出席できなかった。先生が入学前から電話をしてくれて、不安なく学校生活がおくれた。
 - ・クラスメイトとは、コロナで中学時代にできなかったことを話題にして、話すきっかけができた。コロナ感染の予防については、個人の考え方の違いがあるので、その人の考えを尊重するようにしている。

- ③ 今までの人生で、大人の言動について、理不尽だな、納得できないなど感じたことを教えてください。
- ・校則は必要なのか？制服は高額で、親の負担が大きくなっていると感じている。
 - ・両親の喧嘩で不安になった。
 - ・高校卒業後は一人暮らしをしたいが、親が反対する。
- ④ これから社会に出るにあたって（大人になるにあたって）、不安なこと、変えてほしいことはありますか？また、期待すること、希望を持っていることを教えてください。
- ・18歳で成人になります。自分で考えなくてはいけなくなり、もうサポートをしてくれる人はいないのかと思うと不安です。
 - ・ロシアのウクライナ侵攻が始まり、また戦争が起きている。これからの日本は平和なのか？若い人を戦争に行かせないことを考えないといけない。

参加者と高校生との意見交換も積極的に行われました。参加されていた崇徳高校以外の高校生から、「他の高校生の意見を聞きたくて参加しました。校則については、自分たちの高校でも検討していて、これから意見交換していけたらと思います。」と発言があり、学校内だけでなく、子ども同士が繋がって考えていくこともできると思います。

子どもたちは、大人の私たちが思っているより、コロナに対してしっかり考え行動していると感じました。また、社会問題もしっかり考えています。子どもたちが不安を感じていることを私たち大人は受け止め、何ができるかを考えないといけませんね。

子ども達との交流は今後も続けられます。次回は是非多くの方に参加していただき、直接子どもたちの意見に耳を傾けていただければと思っています。





ほっと一息のコーナー

おとなのあなたの中にいる子どもたちへ

「やかまし村の子どもたち」(1947年)

(やかまし村シリーズ)

アストリッド・リンドグレーン

リンドグレーンと言えば、まず挙げられるのが「長くつ下のピッピ」ですよね。誰もがうなずく代表作です。

この代表作とは趣の異なる作品が、この「やかまし村」シリーズです。リンドグレーンの自伝的要素の強い作品です。特にストーリーがあるわけではなく、三軒だけの小さな村の六人の子ども達が遊んで遊んで遊びたおす日常が、七歳の女の子リーサによって語られているのです。



やかまし村の子ども達は本当によく遊びます。遊びの天才です。理屈抜きにただ楽しいから遊び、冒険する。こっそり手紙のやりとりをし、ごっこ遊びをし、秘密基地を作り、誰かにサプライズをしかけ、家出を試みる。子ひつじを育て、そり滑りをし、学校の行き帰りでも遊びを見つけ遊びを作り出す。

それは安心できる基地、我が家があるからです。「家に帰ればおいしい夕飯と気持ちのいい寝床が待っているという安心感（あとがきより）」があるからです。本来、おとなはそれを用意してやるだけでいいのでしょうか。変に子どもをいじることなく、見守ってやるだけで。

私はこのシリーズを小学生の時に読みました。そのときどんな感想を抱いたのか覚えていませんが、いつも心の中にその存在はありました。小さなやかまし村のたった三軒の家が並んでいる光景が、折々によみがえって

くるのです。半世紀以上も、です。「またいつか読みたい」と思っていました。

もうすぐ高齢者の仲間入りをする私は、ずいぶん子ども時代からは遠ざかりましたが、この体の芯に子どもの私が核となって存在しているのは確かです。おとなになるにつれ、この核の周りに「経験」だの「分別」だの、いろいろなものが層を作りそれが分厚くなり、もうすっかり核は見えなくなっています。でも、最近この物語を読み直してみると、その層がぽろりぽろりと少しずつはがれ落ちて子どもの私があらわになってくるのを感じたのです。

“ああそうだった。子どものあたしはこんなふう感じてこんな気持ちでいたんだ、喜んだんだ、泣いたんだ。”

「子どもを理解する」ためではなく、「自分の中の子どもを再発見する」ために、この物語はどうってつけなものはないと思っています。

※他に「やかまし村の春、夏、秋、冬」「やかまし村はいつもにぎやか」が岩波少年文庫から出ています。

もう一つ「やかまし村のクリスマス」があるらしいのですが、これはどうしても手に入りませんでした。どなたかお持ちでしたらお貸しくださいます。

